

明日を生きたい

ヒマラヤのふもとから

□□①

幼い心と体は傷ついていた。その母は悲しみのたぎりに祈りをさげた。みんな願っていた。「明日を生きたい」。国連が推進する「貧困撲滅の国際年」の今年、毎日新聞社と毎日新聞社会事業団の「飢餓・貧困・難民救済キャンペーン」で、アジアで最も貧しいヒマラヤのふもと、ネパールを取材。貧困の故にあえぐ子どもや女性たちの姿をつぶさに見た。その行く末は不安で、暗い。しかし、「生きるのに必要な医療・教育環境を整えよう」と、数少ない地元の医師らから子どもための病院づくりに立ち上がっていた。阪神大震災に見舞われた日本に、こうした貧しい国からも援助の手は差し伸べられた。今、そのお返しを考へるべきではないか。明日を共に生きるために。

【文・蓮見新也 写真・懸尾公治】

ネパールから インド売春宿

心と体むしばむ貧困

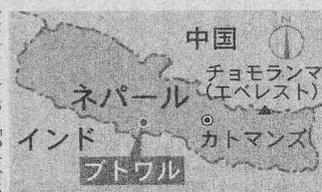
小さな5人の赤ちゃんが、1階の廊下に敷かれた布の上に並んでいた。しわだらけの手は枯れ枝のように細い。少女3人があやしなから、ほ乳瓶でミルクを飲ませている。

ネパールの首都・カトマンズ市中心部近くの住宅街に、「女性の里」と呼ばれるリハビリセンターがある。売春に身をやつて働かざるを得なかった女性たちを救うための施設だ。

女性寮長のアナラタ・コイラさん(47)が、一人の女の子を指さした。「この子の名はリラ。ここに住み込んでいる子どもたちが名付けたんです。エイズに感染しているかも知れないんです」。3日前に入ったばかりだ。両親と3人の姉、弟の6人家族、貧しかったため、11歳の時仕事を探した。リラちゃんは午後1カ月半。母親はインドのボンベイで売春していた。実家に帰ってリラちゃんを産み、5日後にエイズで死んだ。困った家族がリラちゃんをセンターに連れてきた。

その泣き声は、弱い。いつまで続く命なのか。センターの寮の一室で、15歳の少女、サリタ・マガルさんが別の赤ちゃんに左手でミルクをやっていた。蒸し暑い中、厚手の長そでシャツ、右肩には冬に頭に巻く布、ソールを落している。聞けば、やけどをしたという。

ここに、3日前に入った日のうちに放り出され、駆け込んだ警察からセンターを紹介された。「やけどのおかげで、帰ってこれた。ラムロム、バイヨ(よかつた)」。サリタさんは、カトマンズで、毎年5000人から7000人の16歳以下の少女が売春目的でインドの悪徳業者に売られる。危険覚悟で逃げ出すか、



売られる少女たち



母親を求めると、泣き声がリハビリスセンターに響く。ネパールのカトマンズで

エイズ感染が分かった時以外戻っていることはない。センターはこれまで、25人の子供した女性を救済してきた。職業訓練や就職の世話が主で、心と体のリハビリは十分ではない。女性たちがどんな病気を持っているのか。生まれてきた子どもの健康状態と、その治療方法は……。

母はエイズで死んだ

「目に見える援助を実施するため、今年のキャンペーンは従来の国連機関などへの資金に加え、ネパール現地で進められている子ども病院建設計画にも協力します。救済金は、左記へ郵便振替か現金書留で送金いたすか、直接ご持参ください。」

Tel 0081-51 大阪 市北区梅田3-4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救済金」係 (郵便振替 00970-0100001)